

高齢者肺炎球菌ワクチン予防接種についての説明書

～ 予診票を記入する前に必ずお読みください。～



本説明書をご確認のうえ、予防接種を受けて下さい。接種を希望する際には、必ず「予診票」に署名をして下さい。

どうして、肺炎予防が大切なの？

ご存じですか？肺炎は、日本人の死因第5位だということ。しかも、亡くなる方の約95%が65歳以上の方なのです。

(厚生労働省、人口動態統計 2019 年)

肺炎は日本人の死因の**第5位**



肺炎による死亡者の
約95%は
65歳以上¹⁾



肺炎は発症後に急激に症状が進むことがあります。まだまだ若いと思っていっても、年齢とともに、からだの抵抗力（免疫力）は低下しています。日頃、元気で健康的な毎日を送っている方でも、高齢になると、体調の変化などのちょっとしたことがきっかけで肺炎を引き起こしやすくなり、急激に症状が進むこともあります。

肺炎は、65歳以上の方にとって、けっして軽視できない疾患なのです。

肺炎球菌について

肺炎球菌は主に気道の分泌物に含まれる細菌で、唾液などを通じて飛沫感染し、気管支炎や肺炎、敗血症などの重い合併症を引き起こすことがあります。

高齢者用肺炎球菌ワクチンについて

肺炎球菌には90種類以上の血清型があり、定期接種で使用する「23価肺炎球菌ワクチン（一般名：23価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン、商品名：ニューモバックス NP）」は、そのうちの23種類の血清型を予防の対象としたワクチンです。この23種類の血清型は、成人侵襲性肺炎球菌感染症の原因の約6割～7割を占めるという研究結果があります。

※侵襲性感染とは本来は菌が存在しない血液、髄液、関節液などから菌が検出される感染症のことをいいます。

裏面もご覧ください

高齢者用肺炎球菌ワクチン予防接種の副反応について

接種後にみられる主な副反応は、接種部位の症状（痛み、赤み、腫れなど）、筋肉痛、だるさ、発熱、頭痛などがあります。接種後に気になる症状や体調の変化があらわれたら、すぐ医師にご相談ください。

※接種後 30 分間は、医療機関に居るなどして様子を観察しましょう。

予防接種を受けることができない場合

- ① 過去 5 年以内に「23 価肺炎球菌ワクチン」を接種したことがある場合
- ② 明らかに発熱（通常 37.5 度以上をいいます）がある場合
- ③ 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ④ 予防接種の接種液の成分によって過敏症を起こしたことがある場合
- ⑤ その他、医師が不適切な状態と判断した場合

他のワクチンとの接種間隔

- ① 新型コロナワクチンと高齢者肺炎球菌ワクチンとの接種間隔は、13 日以上あけてください。どちらのワクチンを先に接種されても構いません。
- ② 不活化ワクチン（インフルエンザワクチン等）を接種された場合は、接種された日から 6 日以上の間隔をあけると高齢者肺炎球菌ワクチンの接種が可能です。

*厚生労働省ホームページ等より一部抜粋